

質的研究と境界設定問題（メモ）

てんむすフィールド研究会
伊勢田哲治（名古屋大学）

1 なぜ境界設定をするのか

(1) 事実問題として --- 現に存在する区別を明らかにする

(2) 規範的問題として

(2a) 認識論的規範問題として --- 真理や正当化という観点からみて望ましいものとそうでないものを区別する

(2b) 非認識論的（倫理的、美的、政治的）規範問題として ---- 倫理的なよさ、美しさ、政治的な正しさといった観点からみて望ましいものとそうでないものを区別する

科学と非科学の境界設定は元来(2a)の観点における区分

「科学的」という言葉が認識論的規範の問題としての望ましさを含意するからこそ、望ましいものと望ましくないものの区別が必要になってくる。

「質的研究は科学をめざすべきか」というのは(2b)の観点からの問い

2 境界設定の考え方

・線を引かずに境界設定問題を解く（あいまいな境界領域があることは明白な白と黒の領域があることをさまたげない）

・総合的な判断として科学と疑似科学を区別（リトマス試験紙のような単独の基準はない）

・原理的に不可能なことを義務にはできない（「ought は can を含意する」）

境界設定問題にあてはめると、

その研究対象について採用することが不可能な研究手法を要求することができない。

線引き基準の形でいえば

「ある研究分野において明らかにしようとしていることについてもっとよい研究手法が存在するのに意図的に利用せず、その結果そのもっとよい研究手法を使えば達したであろうような結論と大きく食い違うような結論に達した場合、このことはその分野が疑似科学的だと見なされるべきだとする強い理由になる」

3 質的研究への境界設定問題の適用

質的研究が行われる文脈（たとえば社会科学において）

- (1) 普遍的な構造や統計的パターンについて明らかにしようとしているのだが、きちんとした計量的データをとるのが面倒くさい（お金がない、など）
- (2) 普遍的な構造や統計的パターンについて明らかにしようとしているのだが、きちんとした計量的データをとる方法が存在しない（現在なら質問票調査をするようなテーマについて、1000年前にどうだったか明らかにしようとしている、等）
- (3) 個別的な構造について深く明らかにしたい
 - (3a) 明らかにしたいのは客観的な構造や因果関係（ある個人がどうやってアル中になったか）
 - (3b) 明らかにしたいのは主観的な意味や解釈（ある人や文化からみて世界はどうみえているか）

(1)の文脈での使用については疑問あり

(3b)については、われわれが知りたいことであるのかかわらず、適当な計量的手法は存在しない。→むしろ質的手法こそがこの文脈における科学的手法なのだと考えるべき

中間は？